

シンポジウム 1

不器用な子どもたち

～発達性協調運動障害という視点からの理解と支援～

座長:河合 優年(武庫川女子大学教育研究所子ども発達科学研究センター教授)

シンポジウム1は、「不器用」という動作面での難しさについて、当事者視点、支援者視点からその問題の本質に迫ろうとしたものであった。

最初の話題提供者である笹森さんは、32歳の時に発達障害と診断された成人当事者であり、現在は精神保健福祉士として様々な活動に関わっている。その中で、身体に関わる不器用さは、当事者の生活を非常に不便なものにしているが、それだけでなく、発達障害にまつわる不器用の問題への社会の理解が低い原因が、当事者自身の「努力不足」「不注意」に帰属されていると話された。当事者視点からの、話は具体的で深く、不器用さが自己肯定感、自尊心を下げるという話もありアリティを持って伝わってきた。

岩永さんは、認定作業療法士、感覚統合認定講師など、発達障害児の感覚・運動面の問題についての第一線の研究・実践者である。発達障害児に見られる協調運動障害に対する療育や支援を行う際の手順をアセスメントから始まる具体的な例で示しながら、協調運動の問題をどう捉えるのかについて話された。作業療法や療育における、障害志向型アプローチと課題特異型アプローチなどの介入方法を、保護者や教師にどう伝え、どう実践につなげるのかという話題は、笹森さんの子ども時代にこ

のようなアプローチがあればどうだったかと考えさせるものでもあった。

澤江さんは、スポーツ学の視点から発達障害児の運動発達支援をテーマに述べられた。運動の練習で「やればやるほど変になる」という子どもの例や、「教えるほど悪くなっていく」子どもの例は、私たちの不器用さへのかかわり方そのものへのアンチテーゼのようでもあった。伝統的な指導法が見落としていたなにかがそこにあったように思われた。また、「わからない」こと、「できない」こと、「やりたくない」という3つの視点から不器用さを切り取るという視点は、出来ないことに目を向けがちである私たちにとって新鮮な捉え方であった。

時間の関係で中井先生のコメントは多くいただけなかったが、「不器用さ」に目を奪われてその神経学的基礎や環境との相互作用に関する基本的な知識についての注意が弱くなることへの警鐘は、今回のシンポジウムで何度もみられた。

私たちは環境との調整行動の中で「不器用さ」を感じ、「困り感」を持つが、今回の議論から、「困り感」により「不器用さ」を感じ、それがあからこそ環境との調整が可能になるのだという、良い意味でのループが見えたように感じた。

話 題 提 供 | 笹森 理絵 (当事者・保護者・支援者) 「当事者が語る発達性協調運動障害による困りごと」

岩永 竜一郎 (長崎大学准教授) 「発達性協調運動障害への作業療法、療育からのアプローチ」

澤江 幸則 (筑波大学体育系准教授) 身体的「不器用さ」のある子どもに対する運動発達支援の取組み

コメンテーター | 中井昭夫 (子どもの睡眠と発達医療センター副センター長)

